

6 調査総括

6—1 被害状況

今回の地震は、阪神大震災の11倍のエネルギー、ホームレスの数が約330万人、数百キロ平米におよぶインフラや生活基盤の破壊度などで、スマトラ沖地震・津波を上回る「想像を絶する被害状況」であった。町全体がプレスにかけられたようにペシャンコになったり、山がぼっくり割れたり、地すべりでえぐられていたり、停車中の大型バスが横倒しになっていたりした。そして瓦礫の下には多くの遺体が埋もれたままで悪臭もあった。

国連の救援活動の中核を担う緊急援助調整官室のイグランド事務次長は被災地視察後、「これはわれわれの知る限り最も悲惨な悪夢だ。冬直前のヒマラヤ地帯を大地震が襲い、数百万が影響を受け、100万人以上が自宅を失っている」と語っている。また、世界保健機構（WHO）が実施した震災発生後数日経過した時点での調査によれば、昨年のスマトラ沖津波災害のホームレス者数は150万人に対して、今回はそれを大きく上回ると指摘した。

パキスタン政府は犠牲者数を震災1週間後までは2万5千名としていたが、10月17日現在で4万名を超えたと発表している。これは倒壊した建物の下敷きになった行方不明者の生存率が極めて低くなったために急上昇しているからだ。

政府発表の数値に対してパキスタン最大のNGO代表は「政府はうそをついている。犠牲者数は10万名に上るだろう」と反論する。ヒマラヤ地方を含む山岳地帯で数百キロ平米の広範囲にわたり震災がおよび被害の全体像がいまだ掴みきれていない。今後、救援活動が山岳地帯の奥地に到達するにつれて、犠牲者数や被害規模がますます拡大していくだろう。

民主党のパキスタン地震支援対策本部の現地調査団は、被害の甚大であったムサハラバード、バラコートをはじめ、首都イスラマバード、マンセーラ、ハダル、バタグラム、カリハヒブラ、バラールコートの被災状況、ニーズの把握に努めた。ラマダン（断食）期間でもあるので、朝・昼食もほとんど取らずに寸暇を惜しんでの視察になった。

被害の甚大であったバラコートは元々、渓谷沿いの国内有数のリゾート地だったが、崖崩れにもあい、斜面のホテルや家屋は悉く倒壊し、見渡す限りの瓦礫地帯へと変貌していた。他の被災地はバラコートほどではないにしろ、町や村の大半が爆撃後のように瓦礫の山と化していた。今回パキスタン北東部を中心に発生した大地震の被害は言語に絶する未曾有の災害と認められるものである。